令和５年度　第２回教育課程編成委員会

日時：令和６年３月 29 日（金）20：00～20：50
場所：長崎医療技術専門学校　会議室
出席者：小林小夜子、長尾　博、松本逸郎、有福浩二、大坪　健
　　淡野、韋、林、岩永、荒木、山内
座　長：韋
１．校長挨拶
・国家試験合格率、入学予定者の報告
　総じて全国平均を上回れた。
　国家試験合格発表の結果について　※（　）内は全国
　PT：新卒 91.7%(95.2%)、全体 90.0%(89.2%)、既卒者は４名中３名合格
　OT：新卒 94.4%(91.3%)、全体 89.5%(84.1%)、既卒者は１名中合格者なし
・入学者の状況
　最終的に理学療法学科 39 名、作業療法学科 25 名の入学予定。4 年制大学の合格者が多く辞退者が出たことも要因の一つと考える。
２．出席者紹介
３．開会
　韋）当委員会は第 6 条の規定による出席数を満たしており、本委員会は適切に成立していることを確認する。
４．委員長選出
　韋）委員長は淡野校長ですすめさせて頂く。
５．前回会議後の報告
『スキルアップを１年間実施した効果について』
林）今年度の１年生向けスキルアップの実施について報告する。令和６年度の教務方針では、学習方法と学習習慣の徹底的な獲得を目指し、1 年次から取り組んできた。前期の定期試験の素点に基づく度数分布を確認したところ、下位と上位に学生が分かれる傾向が見られた。特に平均点が 55 点以下の学生には、他のグループとの差が顕著であり、発言の少なさや集中力の低下などの傾向が観察された。
林）次に後期もスキルアップに取り組んできた結果を報告する。前期では、赤い点で示された学生群が普通から若干下の成績だったが、後期終了時点では、飛び抜けた成績の学生がいなくなり、中間層も減少し、赤の実線で結ばれたグループに集中する傾向が見られた。成績の分布を詳しく見ると、70 点から 85 点の範囲と 51 点から 60 点の範囲に学生が集中している。この変化は、中間層が上位に上昇したり、下位が上昇したりして、結果的に二極化が強まったことを示している。原因については詳細な分析が必要だが、学習習慣の身についた学生と、生活リズムが乱れて成績が低下した学生の傾向が見られた。この傾向は上位層の学生にも影響を及ぼしている。
６．審議事項
『本校の実習に関する取り組みについて』
林）指定規則の改正により、臨床実習が大きく変わる中、学校と臨床実習指導者との関係が重要視される。改正点として、実習前後の評価が知識や態度面も含むようになり、実習指導者には条件が設けら

れる。臨床実習は 4 つの実習に分かれ、新たに「通所リハビリテーションと訪問リハビリテーションに関わる実習」が追加された。実技試験に加えて OSCE が行われ、実習後は面談や成果報告会を通して評価される。臨床実習の動画を振り返り、学生の成長を促す取り組みが行われており、成長を促すためのフィードバックやルーブリック評価が導入される段階である。

松本）これは点数で評価するのか。できれば 1 点ということか。

林）現時点ではそうである。しかし、評価を点数化することに疑問があり、現在のレベルや次のステップを把握することが目的である。臨床実習における課題として、学生の能動的な参加を促すこと、読解力の向上を図ること、学生の成長を促す方法を考えている。また、学校と実習施設間での情報共有を強化することも重要だと考えているが、先生方からの意見を歓迎している。

小林）学校の取り組みに満足している。事前・事後の指導は重要だと感じる。自身は保育関係であり、OSCE のような試験は経験していないが、コロナの影響で実習に取り組む方法を検討し、学生同士での練習を行った。学生が子供役を経験し、子供の気持ちが理解されたことで評価が高かった。OSCE 前に学生同士で役を演じて評価し合うことで、より良い結果が期待できるだろうと思う。

林）本校では、OSCE を行う前に学生にさまざまな課題を与え、プロセスを段階的に講義して進める形式を採っている。学生には最低限の流れを理解し、患者役と評価者役を決めて練習させているが、シナリオを覚えるだけでなく、丁寧に行っているつもりでも乱暴になる傾向がある。先生方の意見によれば、患者役としての気持ちを振り返る機会を増やす必要があると感じている。

大坪）OSCE について、保育科の場合、自身が子供だった経験から新しい気持ちを学ぶことができると感じる。しかし、学生が患者役を演じる場合、患者の気持ちは理解できても、生涯学習障害の理解が不十分かもしれないと疑問を抱いた。他の学校では外部の患者役を呼ぶ場合もあるが、OT の場合は専任の教員が行うので問題ないと考えるが、学生が患者役を演じることには疑問が残る。

林）4 年前までは、理学療法の実習も教員が担当していた。しかし、学生数が増えて体力的に難しくなった。大学院の学生や臨床教員が関われば、本物の患者を診る経験ができる状況が最良だと思う。評価者役の学生も学びがあり、最低限の流れを学べる。患者役をすることで、患者の状況を考える機会が得られる。これが現時点での理学療法学科の目標である。

有福）学生が患者役をすることは非常に良いと思う。患者は一人ひとり異なるため、評価や受け入れることを経験することは重要だと考える。複数の評価を受けることは大切であり、異なるやり方を経験することでフィードバックを受けやすくなる。患者を演じることは病院の役割であり、健康な状態同士でのコミュニケーションは難しいが、自分がされる側の経験から学ぶことが目的だと考えている。

林）ビデオで自分の行動を見ることは、学生が自分の思っていることと実際の行動のギャップを感じる機会を提供する。動画を見て振り返ることは非常に効果的であり、学生は実際にできると思っていたことと違う場合もある。また、距離感などについても、自分が感じていたとは異なる評価があることに気づくことがある。このようなフィードバックは重要だと思う。

松本）これは 2 人で行うのか。

林）その通り。

松本）ギャラリーはいないのか？

林）ギャラリーは評価者が 1 人である。

荒木）OT も一人が患者役で、1 人の教員が評価者役で行う。

松本）何人かが見て、実施後に意見交換などを行わないのか？

林）翌日以降に動画を見ながらフィードバックを行っている。

長尾）1 年から 3 年生までの 3 年間までの実習の全てに OSCE を行うのか。

林）基本的には 3 年生の 8 週間の実習、総合臨床実習の枠組みのところで行うのが望ましいと言われている。

長尾）臨床心理士の実習では、ロールプレイが行われる。ロールプレイの経験自体に意味があり、その評価は難しい。OSCE は客観的な試験だが、重要なのは自己評価と先生方の評価のずれを学ぶことだ。評価が一致していれば問題はないが自己評価と他者評価を比較し学習することが重要である。

林）実習の評価は様々な観点から行われる。まず、実習に臨む能力があるかどうかを確認するために OSCE が行われる。また、実習終了後の評価では、学生の成長や指導者の評価を考慮し、面談が行われる。感じ方や変化に焦点を当てて評価する。

長尾）前段階を OSCE でするわけだと思うが、その評価と実習後の評価で差が出れば大成功ではないか。

韋）その他、報告であったスキルアップの部分で何かないか？

長尾）私の主観では、前期と後期で変化が起こった原因は、明らかにグループの差にあると思う。学生がどのようなグループと関わっているかによって、成績や態度に影響を受ける。集団心理が作用すると、良い方向へも悪い方向へも傾く傾向がある。

林）例年の形とはちょっと違うと感じる。

長尾）その集団全体がいい方向に行くような集団の常習性というか、まとまりがあれば全体が 1 個となる。

林）集団が二極化すると、どの集団に向けて講義をしていけばいいのか、少し難しく感じる。

長尾）学校の方針によっては、成績が低い生徒を重視する場合もあれば、優等生を中心にする場合もある。しかし、優等生中心の場合、成績不振が増える可能性もある。

松本）学校生活では、自然にグループが形成されるが、その中には良い学生がいるグループもあれば、悪い学生がいるグループもある。悪いグループに所属すると悪影響を受けることがあるため、工夫が必要だ。特に、国試対策など重要な時には、良いグループが重要だが、1 年生や 2 年生の段階でグループを前向きに導くことも重要だと思う。

小林）優秀な学生がレベルダウンする原因について、現象的には二極化が起こることは理解できるが、その背後にある理由について知りたい。

林）推測ではあるが、クラス上位の学生が、前期に比べて成績が下がっていることがある。これは、専門科目への移行による学問の難易度の増加が影響している可能性がある。また、不安から成績が低下する学生もいるように感じる。自らの限界を決めつけて頑張らない学生が集まっている印象がある。

長尾）統計的には中心効果ってある。良い学生が変な大学に入ったら、そこまでしなくていいということで成績が下がるので統計上の解釈はできる。

小林）統計的には中心化が認められるが、教育現場から見ると、優秀な学生が成績を下げた原因を明らかにしたいという願いが出てくる。中心化が進む中で、その状況に留まっていて良いのかどうか、少し疑問である。

林）今年度は、小グループで補習を行ってきた。しかし、「できる学生」と「できない学生」への支援の均等性に疑問が生じる。教員個々の差によるものではないかと考える。また、できる学生への褒められたい欲求が高まっており、私自身もその傾向に反省する。できる学生だけでなく、できない学生へのサポートも重要であると感じる。褒めることやおだてることなしに、全ての学生が成果を出すのは難しいという傾向があるように思う。

有福）実際、良い学生と悪い学生が入ったグループがあって、良い学生が教えてくれるということが発生してるのか。

林）学習面は結構よくある。スキルアップで 4 限目に 90 分行うとグループではよく勉強はする。勉強のグループで仲良くても、プライベートのグループは違うという感じである。

７．総評

淡野）進級率とか退学者とか人数が増えてきている。順当に上に上がれない学生たちが増えてきており、実際受験者が減ってきて全体的な成績層が下がってきているのも事実である。一方では、私生活から崩れていって、成績が良かった子がどんどん落ちていくというような現象も散見されるので、生活面も含めて工夫していく必要性を感じているところである。

８．閉会

９．謝辞

次回の教育課程編成委員会は、令和 6 年 9 月 29 日（金）19：00 を予定する。